高崎散歩

三たび、四たびの高崎城址



高崎藩印

高崎学検定講座

令和８年１１月１７日（火）

○浅間神社

高崎志云、浅間山ハ･･･高サ三丈、周廻リ八十間許。上二浅間ノ宮アリ、板宮ニシテ、竪弐尺六寸、横一尺五寸アリ、城主ヨリ修補ス。･･･所祭木花咲耶姫命成ベシ。･･･毎年六月十五日祭、十四日昼ヨリ十五日夕迄、参詣群集、土俗相伝フ、建久四年鎌倉殿信州三原ニ狩シ玉フ時、･･･此辺ニテ三日遊猟アリシトキ、此上ヲ御陣トシ玉フ。烏川ヲ渡リ此山へ馬ニテ登リ玉フ故ニ、此辺ヲ馬上宿ト名付ケ、其御座所トナリシ地ニ、浅間ヲ勧請シタリト云々。昔ハ此山ヨリ烏川ノ辺迄ナダラカナル山也。慶長三年築城ノ時、山脚ヲ切開キ道ヲ通ジ、塹ヲ構フ。

（「更正高崎旧事記」土屋老平・1883）

･･･十四日八ツ時より参詣多し。東門をひらき、足軽棒をつきて辻々を警固す。当社の別当は中紺屋町玉田寺なり。･･･早朝より参詣群衆し、城下の商人、桃の類を持出て売る。此社地最も高じて樹木枝をまじへ、盛夏といへども涼風ありて、おのづからあつさを忘る。（「閭里歳時記」川野辺寛・1780）



・浅間山古墳　円墳　直径約 50 ㍍

明治七八年の交此土を用ひ内濠を填め平坦となす、今其趾を認めず、當時巨大なる人骨武器の腐蝕せるもの多く出しも悉く投棄し終れり。

・周辺の古墳

高崎城内所在古墳　　円墳　直径 13~16 ㍍

高崎市 218 号墳（光明寺境内）　　円墳　直径 48 尺（約 14.5 ㍍）

頼政神社古墳　（頼政神社境内）　円墳　直径約 20 ㍍

胡桃塚古墳（胡桃塚公園）　　不明

白木稲荷古墳（下和田町不動かくれの湯北）　不明

お高塚古墳　（下和田町不動かくれの湯東）　不明

〇塵防　ちりふせぎ

・堀の対岸の端に沿って設ける低い土手。道路の土が雨水で堀に流れ込まないためと、夜中などの混雑で人が不用意に堀に落ち込まないために設けた。人の膝より低くする。これより高いと、敵がこの土手を楯にして城を射撃する恐れがあるためである。(「日本城郭体系」)

堀端に堀の際から１尺（約３０センチ）離して、高さ７、８寸（約24センチ)、幅１尺余りの小さな土手を築き、所々に水通を付けたもの。塵芥で堀が埋まるのを防ぎ、また、人が堀に落ちるのを防ぐ。(「甲陽軍艦」)

・「予少年の時、上州高崎を過ぎて、濠上に枳殻の屏あるを見る。この物古くある事なり」

「濠上の枳殻」ほかに、家の周りに枳殻を植えているとの記述あり。

(「水城金鑑」小宮山楓軒・18世紀後半)

・「チリ防木こく今度植候所絵図控」(「高崎城絵図」)

※「枳殻」「木こく」＝からたち（生薬・整腸剤）

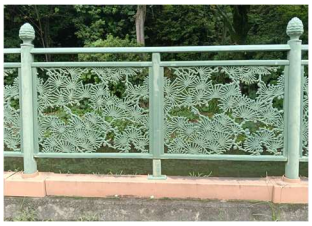
・水原徳言　みはらとくげん・よしゆき

井上房一郎が始めた工芸製品活動に参加。タウトが高崎に滞在した際、共同制作者として関わる。「日本における、タウトの唯一人の弟子」と言われる。





さくら橋



常盤の栄



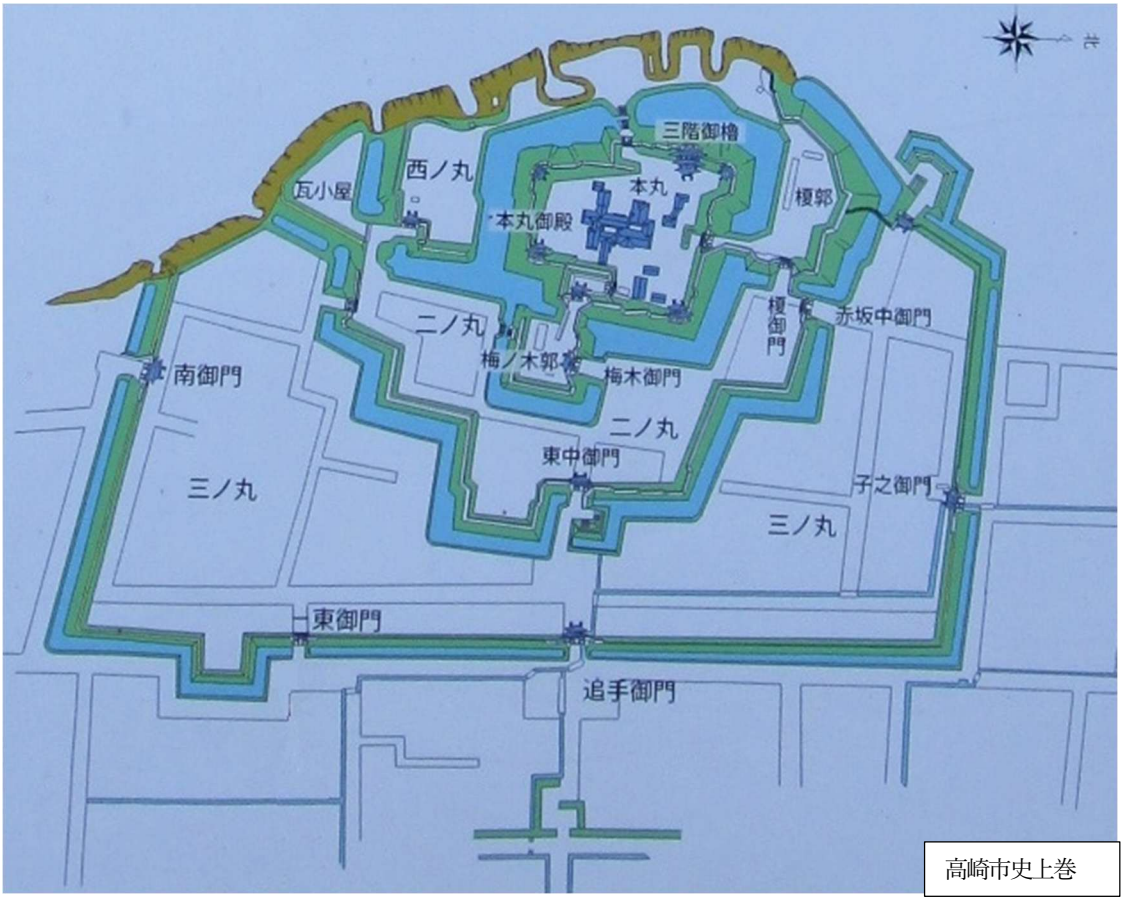
松風の調べ



松文結び

高崎城

〇縄張り



本丸を烏川を背に置き、これを榎郭、二ノ丸、西郭が三方向から囲み、さらにその外側を三ノ丸が囲む三重構造で、梯郭式に分類される。

梯郭式（近世城郭において主流となった縄張り）

少ない敷地や自然地形を効率的に利用して、高い防御力が得られるという利点があるが、想定外の方向から攻められると弱点となる可能性がある。

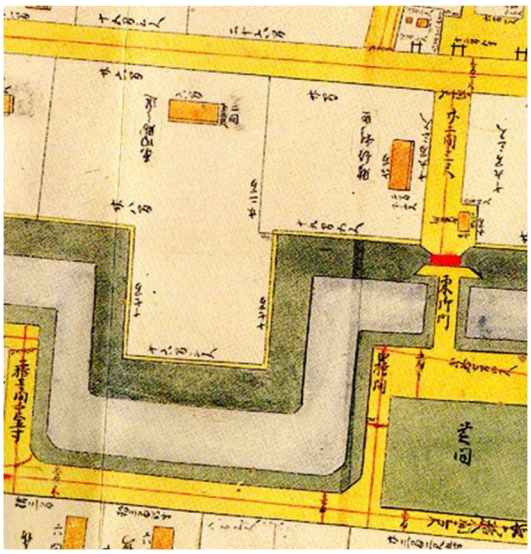
〇三ノ丸(三之郭)

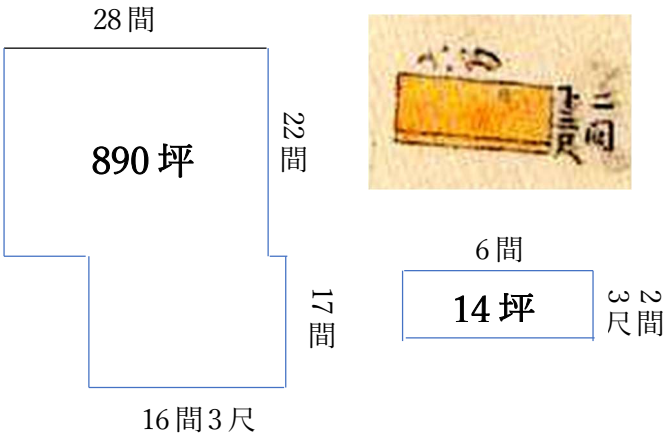
・『高崎城大意』に三之郭は一種の捨て郭で、城兵が多い時にはここから出撃し、少人数の時には放棄し、二之郭内に立て籠もるとある。

・角馬出しと出枡以外は直線で、土塁の上に櫓や土居を置かない。

○出枡

※高崎藩　原田家　300 石取り

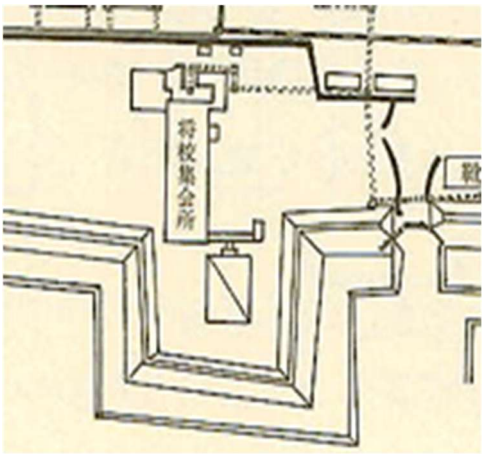




※土岐沼田藩　三浦家　　200～300 石取り

敷地８３５坪、建坪１００坪、部屋数 15

○偕行社　　中国の古典「詩経」の一節。『与子偕行』(「あなたと一緒に共に行こう」)



旧日本陸軍の将校の集会所

①社交や憩いの場

情報交換や懇親のための将校クラブ

(食事や喫茶)

②軍事研究や会議の場

連隊内の重要会議や戦術・作戦などの研究

③購買(物販)の場

軍服(自弁)や日用品の購入



「高崎偕行社」「将校集会所」(ふるさと想い出写真集　高崎)

〇藩主別邸



偕行社(聖蹟餘光)



終戦後の航空写真(米軍撮影)

・五葉松　　「臥竜の松」(がりょうのまつ)







〇将校の暮らし

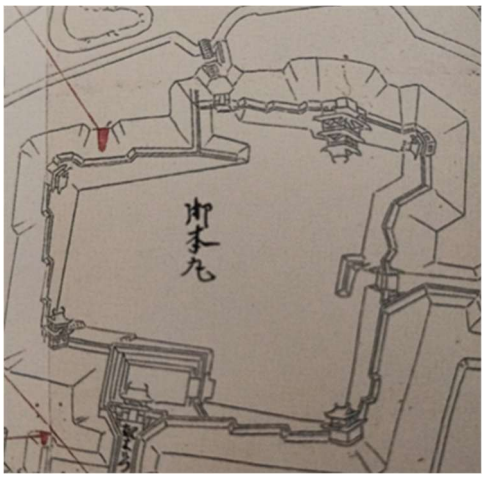
・将校(少尉以上)は営内居住ではなく営外居住が認められていた。兵営の近くに設けた自宅や下宿からの通いであった。

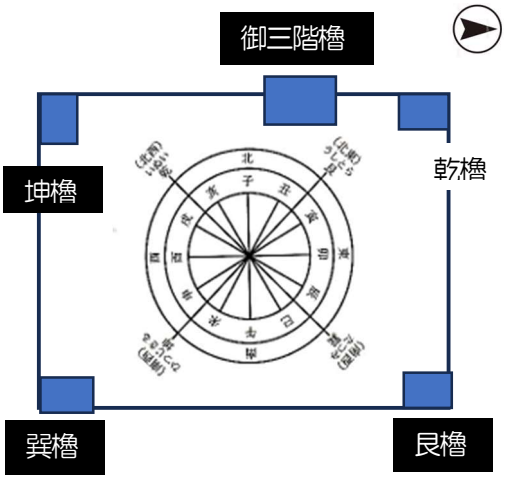
高級将校(連隊長クラス)は柳川町長松寺裏に官舎があった(通称官宅)。

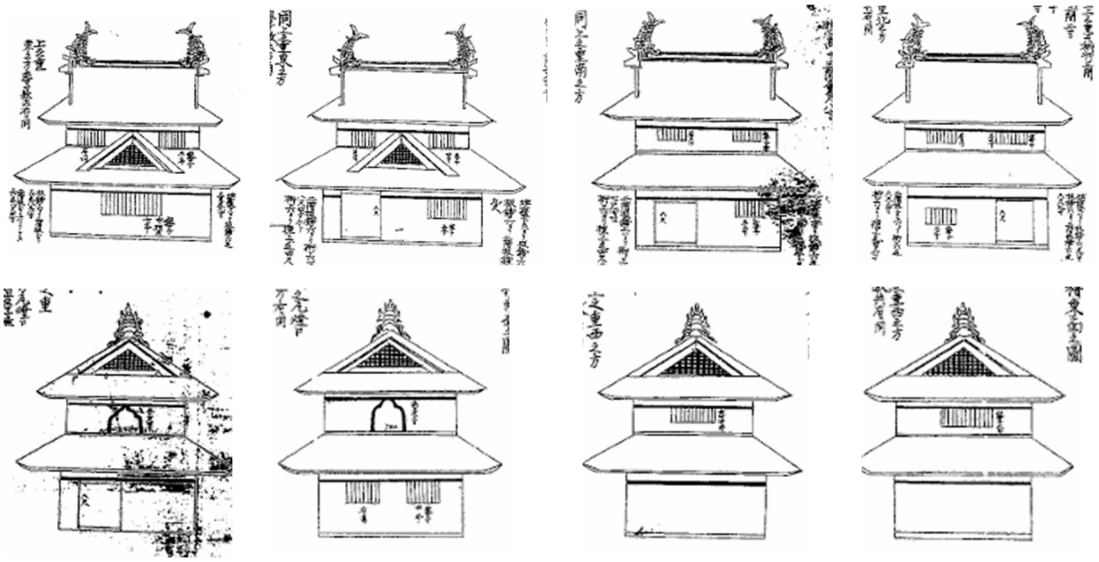
・軍服や軍刀は自己負担。テーラー(仕立屋)で、高級生地を使って自分に体型に合わせた軍服をあつらえることが特権であり、義務であった。

・乃木希典の次男保典(やすすけ)・陸軍少尉。陸軍士官学校 15 期。高崎１５連隊所属。日露戦争に出征、明治 37 年旅順攻囲戦で戦死。享年 24。

○四つの隅櫓







艮櫓
うしとら・北東

巽櫓
たつみ・南東

坤櫓
ひつじさる・南西

乾櫓
いぬい・北西

櫓名	桁行	梁間	格狭間(2階)	破風
艮櫓	24.5尺	18尺	2箇所＋火頭窓	あり
巽櫓	22.5尺	17尺	2箇所＋火頭窓	あり
坤櫓	19.2尺	13尺	2箇所＋1箇所	なし
乾櫓	19.0尺	13尺	2箇所＋1箇所	なし

・東側の艮櫓・巽櫓には東、西の両面に破風が、南、北の両面に火頭窓が付く。

・艮櫓は妻側に入り口があり、ほかの巽櫓・坤櫓・乾櫓は平側に入り口がある。

・艮櫓・巽櫓は下層に対し上層が小さくなっている(望楼型)が、坤櫓・乾櫓は上層、下層とも同じ大きさ(層塔型)である。

・西側の坤櫓・乾櫓は東側の艮櫓、巽櫓に比べて小さい。

⇩

■東側の艮櫓・巽櫓は破風や火頭窓を付け、見栄えのする造作

→城の正面である東側を意識した普請。

■４つの櫓の中で艮櫓が最大。さらに、御三階櫓、巽櫓、坤櫓、乾櫓が土を盛り上げた高足台に建てられたのに対し、艮櫓は石垣の上に建てられた。

→本丸に侵入しようとする敵に対し、正面や斜め方向から、矢や鉄砲を放つことができる。

■４つの櫓で最も乾櫓が小さい。

→御三階櫓に最も近いことから、御三階櫓の威容を際立たせるため、意識的に小振りとしたか。

■御三階櫓と乾櫓は中山道から江戸に向かおうとする敵が最初に目にする構造物

→御三階櫓、乾櫓に角馬出しで敵に対する防備の初手とする。

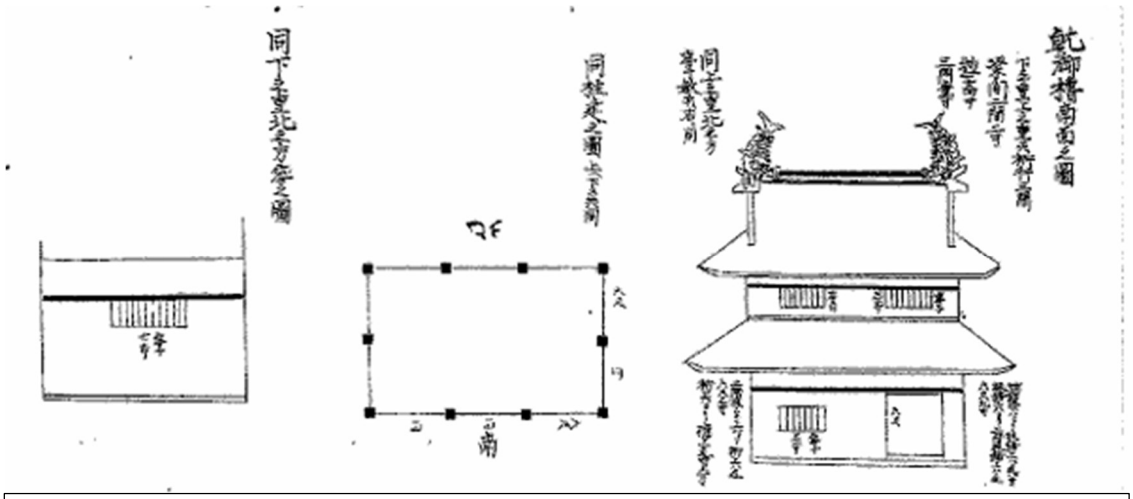




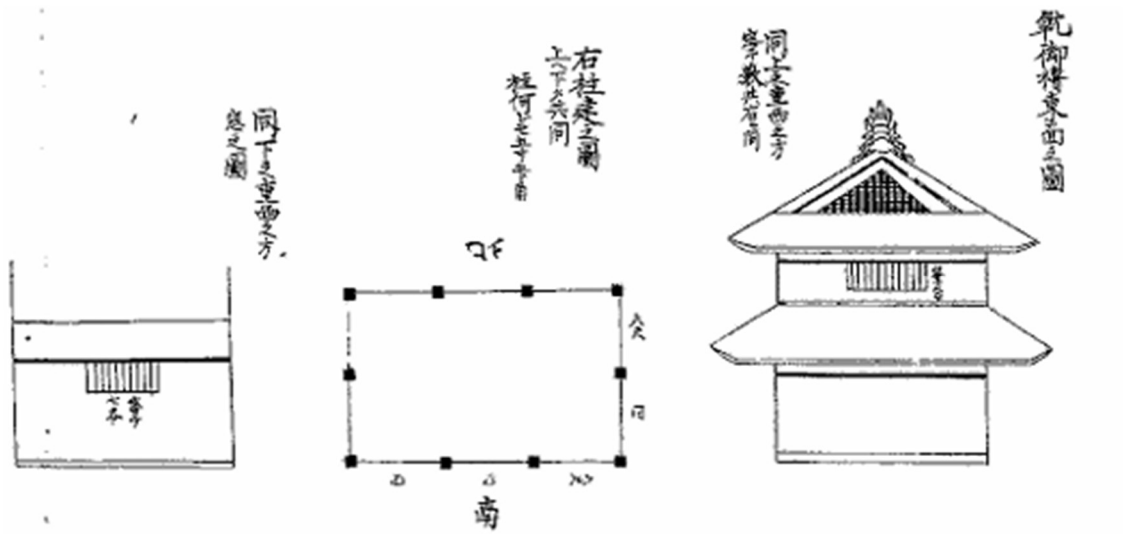
昭和 50 年頃の乾櫓

明治６年に払い下げられ、下小鳥町の農家の納屋として使用されていた

○高崎城絵図(櫻井一雄家文書)

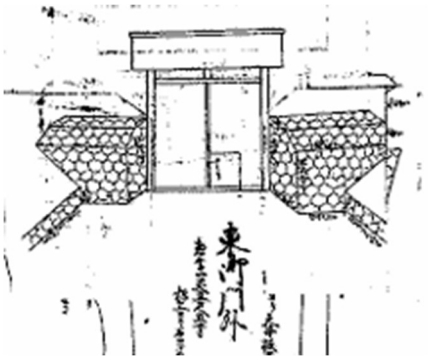


乾御櫓南面之圖
下之重上之重共桁行三間
梁間二間二寸
惣高サ
三間壱寸
同上之重北之方
窓子數共右ニ同
同柱建之圖上へ下タ共同
同下之重北之方窓之圖

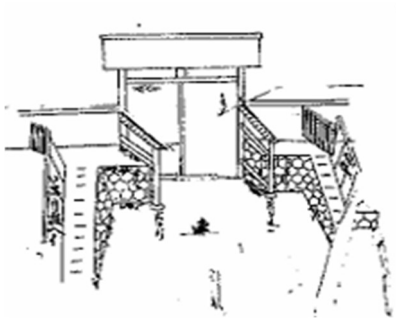


乾御櫓東面之圖
同上之重西之方
窓子數共右ニ同
同柱建之圖
上へ下タ共ニ同
柱何レモ五寸五分角
同下之重西之方
窓之圖

〇東門



東門外



東門内

〇二ノ丸御殿表御門？





棟門(門柱２本に屋根を架けた簡素な門)に分類。

表

・屋根は入母屋づくりで瓦葺き。

・観音開き(内開き)の門扉とくぐり戸。乳鋲(ちびょう)。

・くぐり戸脇に番所。

・出窓(武者窓)(連子をずらして外を見ることができる)。

裏

・門扉とくぐり戸に閂(かんぬき)。



〇本丸御殿から二ノ丸御殿へ引っ越し



本丸御殿

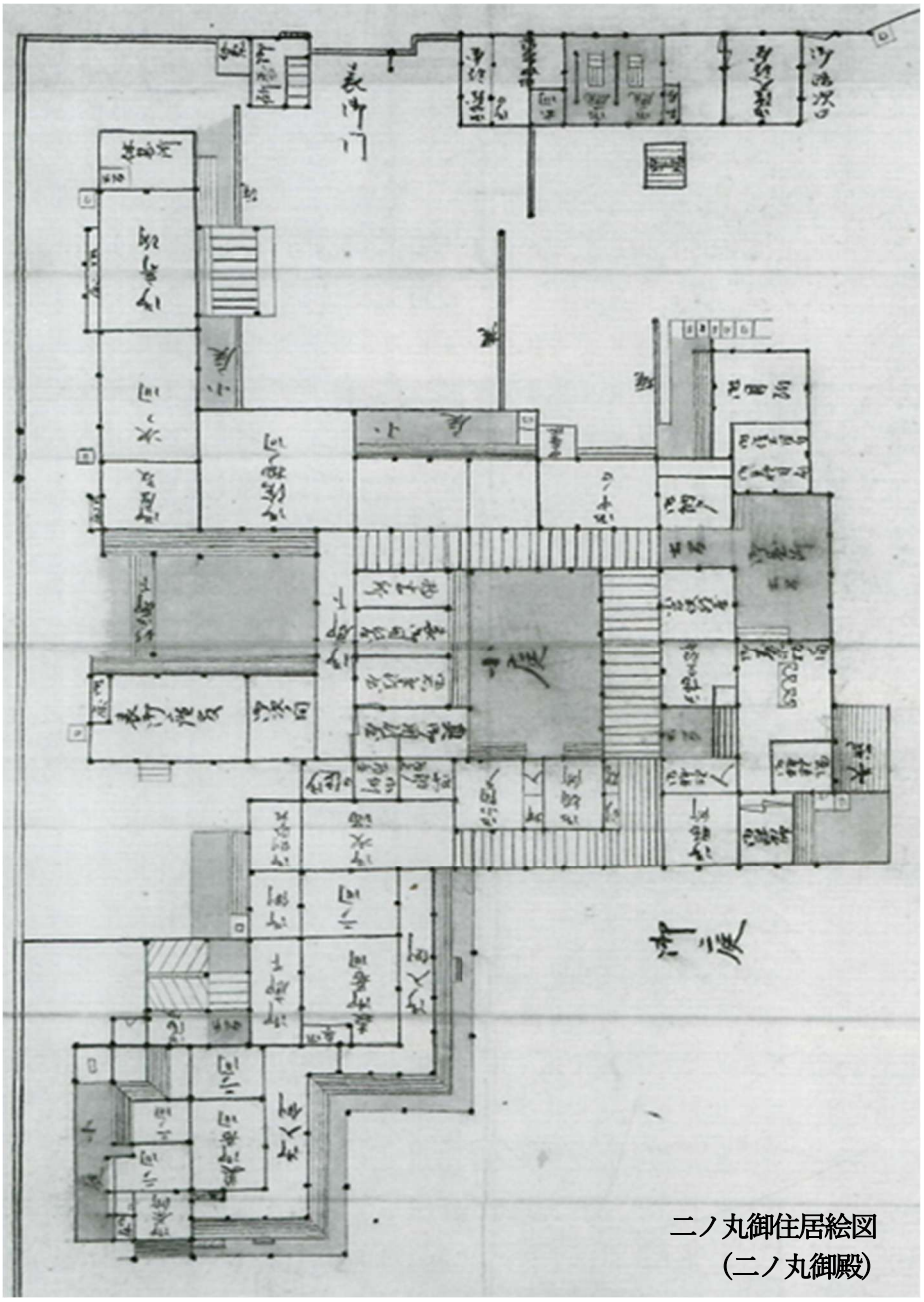
・井伊直政は本丸内に御殿(本丸御殿)を構え、住居とした。「萱葺龍相之御殿」

・安藤氏の頃に整備されたものか。

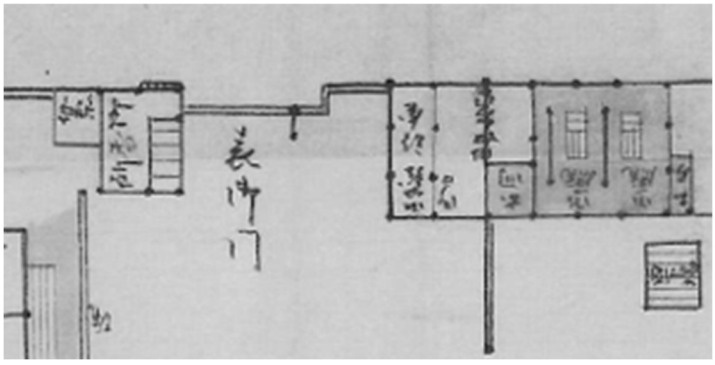
・御殿に能舞台が付属していた。

・本丸内は非常に水はけが悪く、生活の場としては不適であった。

→大河内氏が二ノ丸内に御殿をつくった。



二ノ丸御殿



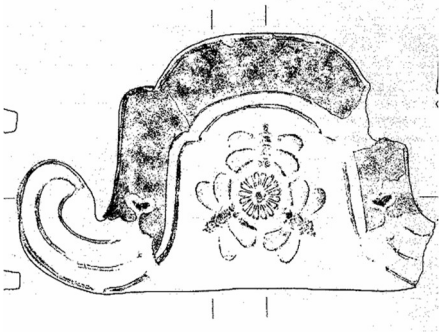
二ノ丸御殿表御門

門右
出窓・御番所・休憩所

門左
駕籠部屋・中間部屋
厩屋
駕籠での出入りが可能

○鬼瓦





火頭窓風の枠内に浮線蝶(大河内家家紋)を配置する



浮線蝶(大河内家家紋)



三つ雁木扇(大河内家家紋)



藤ノ丸(安藤家家紋)



櫓と塀



連子窓



鯱と鬼瓦



狐格子と懸魚

○陸軍歩兵１５連隊(高崎１５連隊)

明治　6 年　　東京鎮台高崎分営設置

明治 17 年　　陸軍歩兵 15 連隊創設(兵員 350 人前後)

明治 20 年　　三大隊編成の連隊となる(兵員 1,400～1,500 人前後)

大正 14 年　　陸軍歩兵 15 連隊存置決定

昭和 12 年～　歩兵第 115 連隊、東部第 38 部隊とも呼ばれる(兵員 3,000 人前後)



明治 6 年頃の高崎分営



明治 18 年高崎分営(陸軍迅速図)



昭和 9 年歩兵 15 連隊(高崎市地図)



飛龍の松(聖蹟餘光)

○飛龍の松

・昭和 9 年発行の「聖蹟餘光」から飛龍の松と「飛龍松之記」と乃木希典の胸像が確認できる。枝振りや周囲の様子から明治 29 年に植栽された松ではない？2 代目か？

○連隊営門前の三角公園



高崎市の昭和



・日露戦役記念園(俗に三角公園と言われる)

「営門前ニアリ、久シク共同便所ノ設アリ、其位置ハ多数人目ニ觸ルゝ所、極メテ醜態ナル」(「高崎市史」下巻)。これを憂えた市民の寄付を元に明治 43 年兵舎の改修に合わせて大改修を行う。石柵、大噴水、アーク灯を備えた庭園に日露戦争の戦利品である大砲、砲弾の展示をする。







・タブノキ広場



「木霊の宿る木」から「タブノキ」に。
古くから神秘的な木とされてきた。古代、巨木になることから、丸木舟の材として利用された。

昭和 43 年(1968)、スズラン百貨店高崎店開店。

昭和 47 年(1972)、植樹。
埼玉県小川町で買い付けた樹齢 200 年。樹高 20 ㍍、枝張り 25 ㍍、幹廻り 4 ㍍の巨木。
①シンボルツリーに相応しい存在感
②都市環境や移植に耐える生命力
③緑を絶やさない常緑樹

「しみづ農園」(矢中町)ホームページ

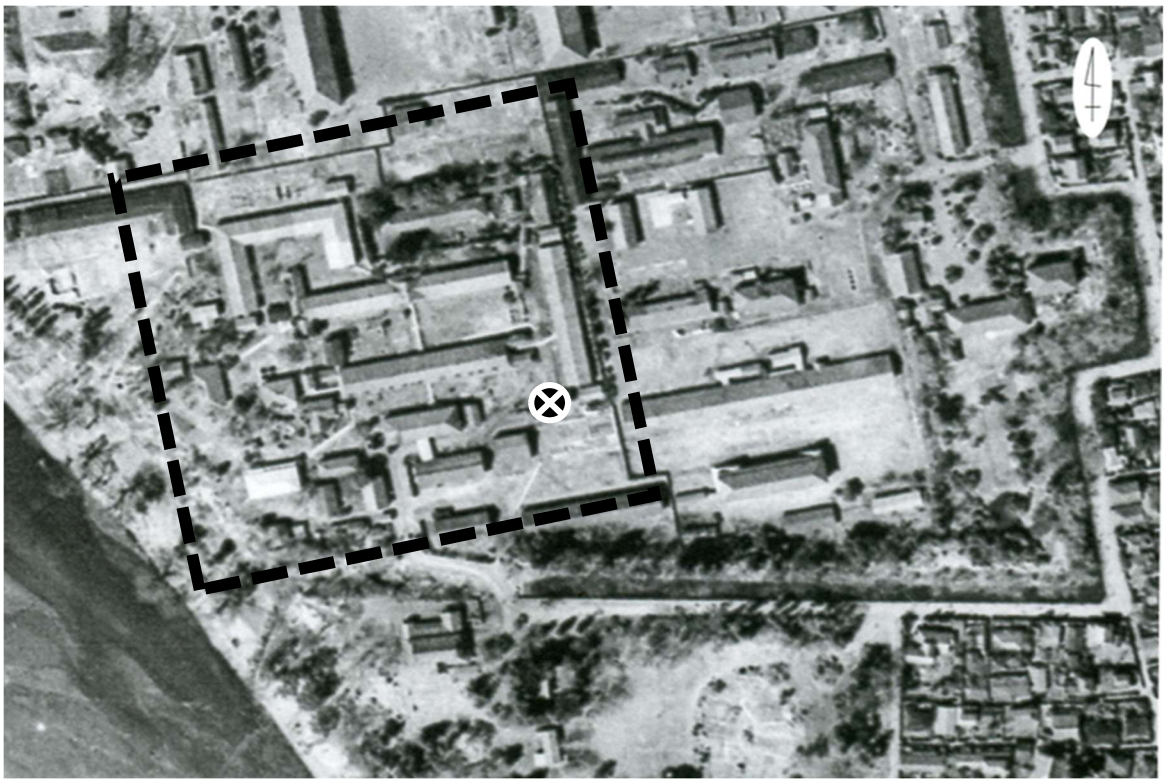
○高崎陸軍病院

明治　6 年　　東京鎮台高崎営所病院として開所

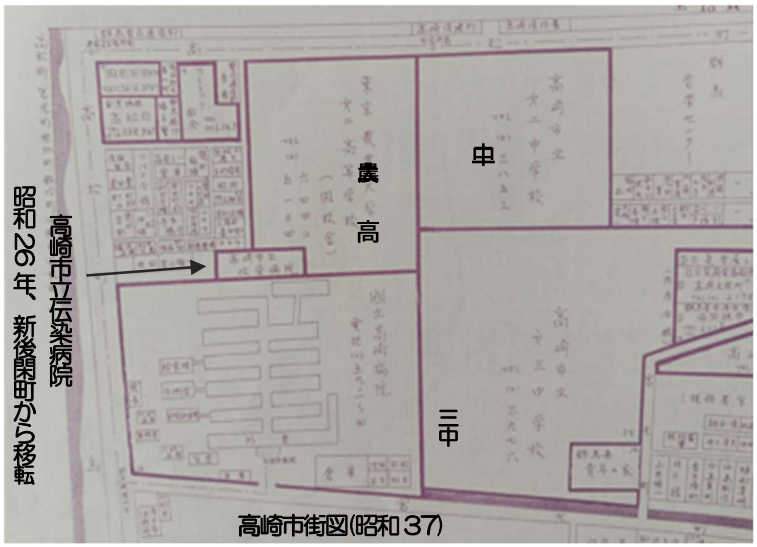
明治 21 年　　高崎衛戍病院と改称

昭和 11 年　　高崎陸軍病院と改称

昭和 20 年　　厚生省に移管　国立高崎病院と改称



国立高崎病院(昭和 24 年米軍撮影)



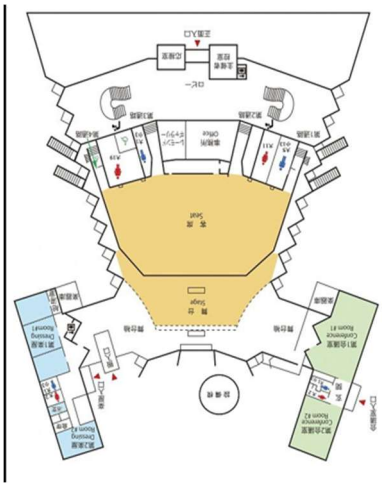
高崎市街図(昭和 37)



・昭和八年十二月廿三日で始まる碑文
・昭和八年六月病院本館の竣工を記念したものか？

○群馬音楽センター





外の景色

打ちっぱなしのコンクリートの壁を折り紙、屏風や蛇腹のように並べた構造(シェル構造、折板構造）が特徴。ザリガニやサソリに例えられる。型枠の木肌がスタンプされている。

・柱を少なくし、大きなスパンでの架柱ができる→広い空間が得られる。

・材料が節約できる。

・印象的なデザインを可能にする。

・正面の巨大なガラス窓→建物の顔として、開放感ある印象を与える。

・北向きであるため直射日光を防ぎ、優しい自然光を取り込む。

・夜間、照明によって内部が華やかに浮かび上がる。



弾琴男子像(前橋市朝倉町出土)



音楽記号「ナチュラル」



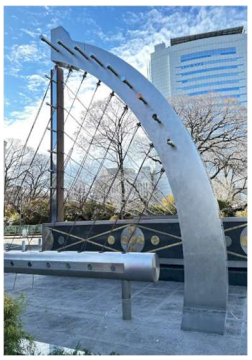
電話BOX(コントラバス)



ハープ



喜び（吉田光正・高崎市出身）



ハープの泉

中の景色

曲面の大きな階段。三角形に区切られた空間に丸く刳り抜かれた窓が連続する。

壁を飾る巨大なフレスコ画。

・アントニン・レイモンドとノエミ夫妻の合作。





客席　五角形のコンクリート構造。

・合間に設けられた照明が五角形であることを印象付ける。柱を少なくし、大きなスパンでの架柱ができる→広い空間が得られる。

建設費３億3,500万円

この内、約3,500万円は市民からの寄付、約7,000万円は企業や有力者からの寄付



山崎種二

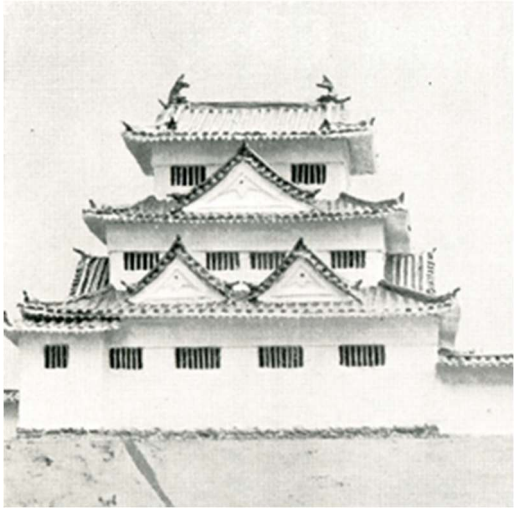


山種美術館
Yamatane Museum of Art

安田靱彦デザイン



中西啓之助



高崎城　御三階櫓

山崎一著「群馬県古城塁址の研究」口絵